

## 死んだ労働による生きた労働の支配

——マルクスにおける資本の独自の本性の把握——

頭 川 博

はしがき—問題の所在

賃労働者の前身は生産手段と生活手段とからなる生産条件を個人的に所有する独立生産者であるが<sup>1)</sup>、マルクスによれば、資本主義社会では、独立生産者から分離された生産条件は、必要労働分量の圧縮を媒介として労働力が剰余労働を創出する特殊歴史的な属性を獲得することによって、必然的に自己増殖する属性を付与される。社会の一部の人々と大多数の人々との間に横たわる生産条件の敵対的な所有関係が物的な生産条件そのものに自己増殖する属性を与えるのである。従って、生産条件がその所有関係の変化によって自己増殖する属性を付与され資本として機能する限りでは、理論上資本の生成に後続して資本家が形成されるという先後関係が成り立つ。そうだとすれば、ここで、生産条件が剰余労働を含む生きた労働を吸収して自己増殖することから、生産条件に代表される死んだ労働が生きた労働を支配するという主客転倒が生じる。死んだ生産条件は生きた労働者を充用して自己増殖する一方、労働者は生産条件が自己増殖するための単なる手段になる。死んだ労働による生きた労働の支配、これこそマルクスの把握による資本の独自の本性にほかならない。

ところが、従来、死んだ労働による生きた労働の支配という資本の独特な本性が十分分析されていない。先ず第一に、資本家は、最初に生産手段のみならず生活手段をも含む生産条件全体の排他的所有者として労働者に相対するという基礎的な関係が一般に未承認である。今期の労働者が消費する生活

手段は、資本家に帰属する前期の労働者の生産物だという命題が確認されていない。第二に、生産条件の排他的所有という独自の所有関係そのものが生産条件に対して自己増殖する属性を与え、その同一の所有関係の二面として資本と賃労働が成り立つ一元的な因果関係が未解決である。資本家が資本の人格化だということは、資本の生成が資本家のそれに先行する事実と等価であるが、これまで、資本家の機能に先行して生産条件の独自の所有関係それ自体から資本の生成が直接導かれてはいない。第三に、独自の所有関係の成立から資本の生成が規定されないその帰結として、客体としての生産条件が主体である労働者を逆に充用して自己増殖の単なる手段に転化させる物の主体化と主体の物化という転倒性が深められていない。第四に、死んだ労働による生きた労働の支配という資本の本質規定の曖昧な理解の反面で、機械制大工業こそ資本の本質に適合的な生産形態たる所以が根本的には未解決である。死んだ労働による生きた労働の支配は、それが資本主義を奴隷制や封建制のような人身的な支配・隷属関係に直接もとづく生産形態から区別する差別性である限り、特殊歴史的な生産形態としての資本主義認識の核心にふれる一つの根本問題である。

それゆえ、本稿の課題は、同一の所有関係の二面として資本と賃労働が成り立つ因果を考察して、死んだ労働による生きた労働の支配という資本の独自の本性を解析することにある。これによって、生産条件の排他的所有を回転軸とするマルクスの資本概念の展開は、変化に富んだ起承転結の完結性をもつことが明らかになる。

- 1) 「直接的生産者である労働者自身に所属している生産手段や生活手段は、資本ではない。」(*Le Capital*, 1872-75, p. 344, 圈点一頭川)

## 1 資本家による生産条件の排他的所有

通例、資本家が生産過程の開始時点で生産手段を所有する事実に異論は存在しないが、それと同時に現物の生活手段を所有する事実は一般に未承認である。しかし、資本家が労働力商品の売り手としての労働者に生産手段と生

活手段の所有者として相対することは、マルクスの不動の立場であった。労働者は、生産の開始時点で生活手段を所有しないがゆえに、労働力商品を販売せざるをえないのである。資本家が生産の出発点で実物的には生産手段しか所有しないとすれば、生産手段と生活手段の全体に代表される死んだ労働による生きた労働の支配という命題は成立しなくなる。そこで、本節で、資本家は、生産の始点で生産手段と生活手段両方の所有者として労働者に相対する事実を確認する。

生産の開始に必要な契機として、人は、労働力を別とすれば、現物的には機械や原料からなる生産手段だけを想起しがちになるが、ここに一つの陥穽がある。というのも、生産活動とは労働力の生産的消費つまり労働力の実現<sup>1)</sup>であるが、労働力の実現には生産手段のみならず、労働力を維持するための生活手段が必要だからである。生産過程そのものを眼中におけば、生産活動には物質的には生産手段しか必要でないように見えるが、生産活動に現物的に必要なものはイコール生産過程で機能するものではない。生産活動に実物的に必要なものは、労働力の実現のための条件をなし、生産過程で機能するものだけに還元されない。生産活動に実物的に必要なものは、それが労働力の実現のための条件に等しいとすれば、生産過程での機能の如何に無関係に、生活手段も生産期間中の労働力の維持に必要な物質的な条件として、生産手段と同様に生産条件または労働条件を構成する。生産過程は本質的には労働過程に還元されると考えれば、生産に必要な物質的条件は即労働力の実現条件に帰着し、労働力の実現にはその維持のために生産過程外で消費される生活手段も必要だから、生産過程の開始時点には生産手段と生活手段の両方が準備されていなければならない。生産手段と生活手段からなる生産物は、生産過程の結果であるのと同様にその前提でもある<sup>2)</sup>。「生産の客体的諸条件—生活手段、原料、用具—」(*Grundrisse, MEGA, II/1・2, S. 411*, 圏点—マルクス)や「労働力の実現のための諸条件—生活手段と生産手段—」(*Kapital, II, S. 37*)あるいは「対象的な労働条件—つまり生活手段と生産手段—」(*MEGA, II/4・1, S. 18*, 圏点—マルクス)という規定は、生産過程

の始点での資本家による生産条件（生産手段＋生活手段）の排他的所有の命題に等しい。また、マルクスは、「生産手段（労働力そのものの生産手段としての生活手段をも含めて）」（*Kapital*, II, S. 37）とか「生産手段—労働手段および生活手段<sup>3)</sup>—」（*Ibid.*, III, S. 266）とか表現する場合があるが、文脈の上で、生産手段は、物質的な労働条件という意味で生産手段と生活手段を含めて広義に使用される場合がある事実<sup>4)</sup>に注意を要する。

資本家による生活手段を含む生産条件の排他的な所有という認識は、『資本論』体系のなかで一貫して堅持される。先ず第一に、貨幣の資本への転化が説かれる際、次のように確言される。「資本は、生産手段や生活手段の所持者が市場で自分の労働力の売り手としての自由な労働者に会おうときにはじめて発生する。」（*Ibid.*, I, S. 184）つまり、資本家が労働力商品を買う際、あらかじめ生産手段に加えて生産期間中に労働者が労働力を発揮し続けるために消費する生活手段を所有している旨、明言されている。第二に、資本家が絶えず生活手段をもって労働市場で労働力商品の購買にのぞむということは、生産の繰り返しのなかでは、今期の生産過程で働く労働者が購入する生活手段が、実は前期の生産過程でつくられた前期の労働の産物だということの意味する。今期の労働者が消費する生活手段は、今期の産物ではなく前期の生産過程の産物だというのが『資本論』第I巻第21章「単純再生産」で定立された一命題である。「先週とか過去半年間とかの彼の労働によって彼の今日の労働とか次の半年間の労働とかが支払を受ける<sup>4)</sup>」（*Ibid.*, S. 593）とは、貨幣形態が捨象され再生産が現物形態で考察される手続きを踏まえれば、今週働く労働者が消費する生活手段が完了済みの先週の生産過程の産物だということに帰着する。逆にいえば、今期働く労働者が受け取る生活手段が前期の産物だということは、今期の生産過程開始に先だって資本家が生産手段と生活手段をともに所有しているということである。だからこそ、剰余価値の資本への転化が成り立つ物質的な条件は、剰余生産物が追加生産手段と追加生活手段を含むことだといわれるのである。「年間剰余労働の一部分は、前貸資本の補填に必要な量を越える追加生産手段と追加生活手段と

の生産にあてられていなければならない。」(Ibid., S. 607) 今期の追加労働者が消費する生活手段の前期末での存在という命題は、今期の既存労働者による前期の産物である生活手段の消費という命題の一系論にすぎない。単純再生産に関する前者の命題は、拡大再生産に関する後者の命題を即自的に内包している<sup>5)</sup>。従って、最初、剰余価値論に先だって措定された資本家による生産条件の排他的所有という命題は、蓄積論で単純再生産と拡大再生産に妥当する命題に更に具体化されていることになる。ついでに指摘すれば、今期の生産物は資本家の所有に帰属して生産条件としては次期の生産への繰り越しになるから、ここに今期の生産物からの労働者の排除＝「所有と労働との分離」(Ibid., S. 610) が成り立つ。第三に、資本家による生産条件の排他的所有は、歴史的にさかのぼれば、本源的蓄積における資本関係の成立にたどりつく。「資本関係を創造する過程は、労働者を自分の労働条件の所有から分離する過程、すなわち、一方では社会の生活手段や生産手段を資本に転化させ他方では直接生産者を賃金労働者に転化させる過程以外のなにもものでもありえない。」(Ibid., S. 742) 本源的蓄積によって、資本家が排他的に所有する生産手段と生活手段は、それぞれ不変資本と可変資本に転化する一方、無産者に転落した労働者は、生産条件から分離された労働力を商品として販売する立場に追いやられる。かくて、『資本論』第I巻で証明された生産条件の資本家による排他的な所有の命題は、生活手段に関していえば、第II巻第3篇では賃金の前払い原則として発展的に具体化される<sup>6)</sup>。再生産表式では、今期の労働者は、前期末に受け取る今期の賃金で前期に生産された消費財を購入しそれで今期の1年間労働力を再生産する。

翻っていえば、資本家による生活手段の排他的な所有という事実は、古典派経済学がすでに事実上認識した命題であった。というのも、スミスにせよリカードにせよ、資本家が労働者の雇用にあたってその労働期間中に消費する生活必需品を前もって用意している旨、明言しているからである<sup>7)</sup>。但し、古典派の場合、資本家による生活手段の排他的所有といっても、マルクスの場合とは半面相異なる。古典派が資本家による消費財の所有という場合、そ

の消費財は、労働力の維持のための前提条件というよりもむしろ、労働過程での労働支出との関連で前もって存在すべきものと把握される。自動車がガソリンを食って走るように、労働者の労働には消費財の消費が伴うという自然的な観点から、資本家による生活手段の所有が主張される。古典派にとって、生活手段は、生産手段と同様に人間と自然との物質代謝の条件として、生産過程の開始に先だって存在すべき物質的財貨をなし、労働過程との関連で資本家によるその事前の所有が認識される。労働力商品概念のない古典派にとって、資本家のもとでの生活手段の事前の存在は、生産期間中に労働支出が成り立つ単なる自然条件の一つにすぎない<sup>8)</sup>。古典派にあっては、単純な商品生産と資本主義的生産は峻別されない。これに反して、マルクスの場合、生産条件の資本家による排他的所有は、敵対的な生産関係の成立との関連で理解される。消費財の存在は、古典派にとって労働支出が成り立つ条件をなす一方、マルクスにあっては労働力が維持されるための前提条件である。ここに、古典派とマルクスの理解の同一性の半面での差別性がある。

以上、本節では、資本主義社会での敵対的な生産関係とは、資本家による生活手段を含む生産条件の排他的な所有に帰着する事実を考察した。

- 1) 「労働は労働者の活動そのもの、彼自身の労働能力の実現である。」(MEGA, II/3・1, S. 48)
- 2) 「生産には、すでに生産物すなわち個人的消費のための生産物と生産的消費のための生産物が前提されている。」(Ibid., S. 58)
- 3) 「生産手段—それは生活手段をも含む—」(MEGA, II/3・6, S. 2238).
- 4) 「今日またはこれから半年の彼の労働を買い、それに支払うことに役立つのは、彼の昨日またはこれまで半年の労働である。」(Ibid., S. 2247) 今期の労働者は前期の生産物を消費するという第21章の一命題は、従来単純にも、労働者が享受する消費財が資本家の父祖伝来の財産ではなく、労働者自身の労働の所産にすぎないものと理解される(例えば、ローゼンベルグ『資本論注解』2, 宇高・副島共訳, 青木書店, 456-7ページなど)。
- 5) 今期の生産開始にあたって資本家が生産手段と貨幣をもって労働者に接するという説明が一部にある(例えば、内田義彦『経済学史講義』未来社, 1961年, 386-8ページ, 同『資本論の世界』岩波新書, 1966年, 180-3ページ)。しかし、

今期の労働者が今期に生産される消費財を享受するという考え方は、今期の追加労働者が前期の生産物を消費するという第22章の規定と前後撞着する。今期の既存労働者は今期の消費財を享受する一方、今期の追加労働者は前期の消費財を受け取るという立場にたつのであれば、その相違が生まれる根拠の提示が必要である。そればかりか、労働者が今期の生産完了まで消費を延期するという理解は、資本家が生産期間中個人的消費に支出する貨幣によって新生産物の剰余価値部分を実現するという事情とも平仄が合わない(*Kapital*, II, Kap. 17)。けだし、生産期間中における消費継続の必要性は資本家も労働者も同じだからである。

- 6) 拙稿「再生産表式と貨幣資本の前貸」『高知論叢』第11号, 1981年 参照。
- 7) スミス『諸国民の富』I, 大内・松川共訳, 159ページ, リカード『経済学および課税の原理』堀経夫訳, 雄松堂書店, 447ページ, ジェームズ・ミル(1773-1836)『経済学綱要』渡辺輝雄訳, 春秋社, 36ページ, 原書初版1821年刊。
- 8) 「貨幣は常に生活必需品と交換されるものであり, それらは労働者が労働に従事する間に消費するものである。」(シモンディ [1773-1842]『経済学新原理』[上] 菅間正朔訳, 日本評論社, 110ページ, 原書初版1819年刊)

## 2 同じ関係の二面としての資本と賃労働

前節で、資本主義社会において、生産手段と生活手段が一方の極に集積する半面、他方の極にはその社会的な富から分離された労働者が取り残される敵対的な生産関係が成立する事実を分析した。ところが、一步突っこんでいえば、生産条件の直接生産者からの分離というその所有関係の変更そのものが資本と賃労働を生成せしめるのである。生産条件という生産の素材的な要素に自己増殖する固有な属性を付与するのは、その独自の所有関係である。そこで、本節では、生産条件の所有関係の変更それ自体が生産条件を資本に転化させ、理論上資本の生成に伴って資本家が生成する因果関係を説く。

マルクスによれば、生産条件が労働者に帰属する場合、剰余価値は形成されない。独立生産者は付加価値を形成するにすぎない。けだし、剰余価値とは前貸価値の自己増殖分であるが、新価値は市場で売買される商品の生産的消費によって生まれたものではなく、価値を母胎としていないからである。インプットを上回るアウトプットの差額は、単に労働者自身の労働に起因す

る付加価値にすぎない<sup>1)</sup>。独立生産者は、剰余価値を形成しないとすれば、同様に剰余労働を支出せず剰余生産物を創造しないことになり、独立生産者の1労働日はすべて必要労働から成り立つことになる。というのも、必要労働とは、一般に労働者の再生産に要する労働分量であるから、労働者による生産条件の所有の如何によって、労働者の再生産の具体的な内容が相異なるからである。因みに、再生産とは直接的には拡大再生産を指す<sup>2)</sup>。独立生産者は生産条件の所有者として生産規模拡大の担い手であるがゆえに、蓄積財源の生産に要する労働支出も必要労働の一部を構成する。

それでは、独立生産者は必要労働しか支出しないのに反して、賃労働者はなにゆえ剰余労働を創出するのであろうか。剰余労働の創造は、生産条件の労働者からの分離そのものの必然的な所産である。先ず第一に、生産条件の労働者からの分離によって、必要労働分量が独立生産者の場合に比して圧縮される。なぜなら、賃労働者は、独立生産者と違って生産条件を所有しないから、その再生産は単に労働力の再生産に要するだけの狭隘な労働分量に限定されるからである。労働力の価値が正常な活力をもつ労働力を再生産するために要する消費財の価値だけに圧縮されれば、労働力の使用価値 > 労働力の価値という不等式が成り立つ。けれど、労働者が支出可能な労働分量すなわち労働力の使用価値は、少なくとも独立生産者の場合の必要労働だけから構成される1労働日に等しいと仮定できるからである。第二に、資本主義の基礎では、生産条件の一構成部分である生活手段は、労働力の価値と引き換えに労働力商品と交換される。ところが、生活手段が姿態変換するその労働力商品は、労働力の価値よりも潜在的により大きな労働分量を内包する労働力の使用価値を表わすものにほかならない。そうだとすれば、排他的に所有された生活手段は、労働力商品との交換によって、事実上そこに含まれる分量よりも大きな労働分量を取得することになる。だから、資本家によって排他的に所有される生活手段を含む生産条件は、労働力商品との関連で、前貸しされる労働分量よりも大きな労働分量を取得する独特の属性を付与される。その意味で、その排他的な所有によって、生産条件は、対極に位置する

労働力との関連で自己増殖する属性を受け取り資本に転化する<sup>3)</sup>。貨幣であることが金の自然的属性でないのと同じように、資本であることは生産条件の本来的属性ではないが、生産条件は、その排他的所有という生産関係の成立によって、自己増殖する特有な属性を獲得する。社会的富は、イコール資本ではないが排他的に所有されれば資本になるという点で、資本とは「富の特有の形態」(MEGA, II/3・1, S. 23)である。一方、そこで行なわれる労働は、身分関係によってではなく対等な交換行為によってなおかつ剰余労働支出が強制される自由な労働としての賃労働に転化する。

それゆえ、生産条件の排他的所有こそ、資本と賃労働の母胎である。マルクスは、「資本と賃労働とは同じ一つの関係の二つの側面である<sup>4)</sup>」(*Lohnarbeit und Kapital, Werke*, Bd. 6, S. 411) 旨力説しているが、資本と賃労働を二面とする同一の関係とは、生産条件の排他的所有という事実を指す。生産条件の排他的所有によって、生産の超歴史的な二大契機である生産条件と労働は資本と賃労働に転化する。「労働者を賃労働者に転化し、非労働者を資本家に、生産手段と生活手段一般を資本に転化するのは、まさに非労働者の掌中におけるこの生産手段の所有である<sup>5)</sup>。」(MEGA, II/4・2, S. 51) 対立する資本と賃労働の二つを生産条件の排他的所有に帰一させて初めて、資本は神秘の封印を解かれる。更にいえば、生産条件の排他的所有が資本と賃労働を生成させるのだから、資本に後続して資本家が生成する。「資本から資本家が生成する。」(MEGA, II/3・6, S. 2284, 圏点—マルクス)「資本の概念のなかには資本家が含まれている<sup>6)</sup>。」(*Grundrisse*, S. 415) 資本家が資本の人格化だということは、資本の生成が資本家のそれに先行するという論理的な先後関係を内蔵する。生産条件が特殊歴史的にもつ自己増殖する特有な属性は、その排他的所有という客観的な事実起因する。従って、資本と賃労働とは生産条件の排他的所有の二面だという命題と資本から資本家が生成するという命題とはペアをなし、前者の命題から後者の命題がその系論として導かれる。

以上、本節で、生産条件の排他的所有が資本と賃労働という対立する二つ

の契機を生みだし、生産条件の資本への転化に後続して資本家が生成する脈絡を確定した。

- 1) *MEGA*, II/3・1, S. 23, *Ibid.*, II/3・6, S. 2254, *Kapital*, I, S. 180. マルクスは、前貸価値の自己増殖分としての「剰余価値」(*Kapital*, I, S. 165) の概念規定に立脚して貨殖の秘密を解いた後で、「剰余労働」(*Ibid.*, S. 231) と「剰余生産物」(*Ibid.*, S. 243) の規定を与える(剰余価値→剰余労働→剰余生産物)。剰余生産物を「生産物のうち剰余価値を表わしている部分」(*Ibid.*, 圏点一頭川) と規定するマルクス特有の手法に注意を要する。剰余生産物→剰余労働→剰余価値というステレオタイプ化した連鎖は、後世の虚構である。
- 2) マルクスにおいて、再生産=拡大再生産という認識(*Mehrwert*, III, S. 412, *Ibid.*, S. 506 f., *MEGA*, II/3・5, S. 1699, *Kapital*, I, S. 624) は決定的な意義をもつ。再生産=拡大再生産であるがゆえに、マルクスは、拡大再生産が生産の繰り返しという基礎的一面で内蔵するその一般的な法則を単純再生産という抽象的形態で分析する一方、それをこえてもつ特殊的な法則を固有な拡大再生産で考察したのである。再生産とは先ずもって拡大再生産だと規定する場合にのみ、拡大再生産の抽象的形態として単純再生産が正当に位置づけられる(*Ibid.*, II, S. 394)。再生産=単純再生産だとすれば、単純再生産と拡大再生産とは並列的な関係に立つことになる。なお、イギリスで、封建制末期の15世紀ごろ起こったいわゆるコミューション(労働地代の貨幣地代への転化=地代の金納化)の結果、農奴は、萌芽的利潤を蓄積して農地を買い取り独立自営農民になった。ここで、萌芽的利潤と貨幣地代を独立自営農民成立の必要条件と十分条件とすれば、必要条件としての萌芽的利潤は、農奴が土地・農具・家畜などの生産条件を事実上所有するその関係の必然的な所産である。農奴による生産条件の所有という事実は、その必要労働が蓄積財源の労働支出分を含む関係を内包するからである。
- 3) 「剰余労働は生産手段の資本への転化から、すなわち現実の生産者にたいする生産手段の疎外(Entfremdung)から生ずる。」(*Ibid.*, III, S. 453) ここから、『資本論』第III巻の草稿執筆過程ですでに、マルクスは剰余労働=超歴史説から特殊歴史説へ転回していたと推論される。
- 4) 「資本と賃労働とは、同一の関係の二つの要因を表現するものにすぎない。」(*MEGA*, II/3・1, S. 100) 同じ規定は、*Grundrisse*, S. 698 f., *Mehrwert*, III, S. 482, *Resultate*, S. 79 にもある。
- 5) 「非労働者によるこの生産手段の所有こそは、労働者を賃金労働者に転化させ、非労働者を資本家に転化させるのである。」(*Kapital*, III, S. 51) 同じ趣旨の叙述

は、*Mehrwert*, III, S. 452, 『資本の流通過程』大月書店, 中峯・大谷他訳, 46ページにもある。なお、「素材的富の対立的な社会的規定性」(*Kapital*, III, S. 368)は、生産条件の排他的な所有と等価である。因みに、「蓄積された労働」(リカード『経済学および課税の原理』[前掲], 472ページ)という古典派経済学による資本の規定は、生産条件そのものを超歴史的に資本の絶対的形態とみなす取り違えに起因する。生産条件それ自体が資本ではなく、排他的に所有された生産条件が資本である。資本は、生産条件の特定の歴史的な形態である。「資本は労働条件の疎外された形態を、一つの独自に社会的な関係を、表わしている。」(*Mehrwert*, III, S. 484, 圈点—マルクス)古典派には、生産条件を資本たらしめるその排他的な所有=独自の生産関係の関却がある。

- 6) 「生きている労働を支配する過去の労働が、資本家において人格化される。」(*Kapital*, III, S. 55)「資本家に代表される社会的な生産条件の独立化」(*MEGA*, II/3・5, S. 1672)。

### 3 生産物による労働者の支配

前節で、生産条件の排他的な所有関係それ自体が資本と賃労働をうみだす必然的な因果を考察した。ところが、排他的に所有された生産条件が自己増殖する資本主義の基礎では、生きた労働が死んだ労働を使用するのではなく、反対に死んだ労働が生きた労働を自己増殖の手段として使う転倒した関係が生じる。そこで、本節では、資本の特有な本性は、死んだ労働が生きた労働を支配する主体と客体の転倒にあることを解析する。

必要労働をこえる労働日の延長によって、資本から剰余価値を生みだす担い手は資本家であるが、その資本家は資本の単なる人格化にすぎず、自己増殖する主体は排他的に所有された生産条件そのものである。先ず、排他的に所有された生産条件が市場で労働力と相対して労働力の買い手としての役割を演じる。そして、生産手段に対して生活手段の姿態変換した労働力が合体させられる。生産条件は、生産手段に対して生活手段の転化形態たる労働力を合体して最初の大きさをこえて増大する<sup>1)</sup>。だから、資本主義的生産では、生産条件そのものが独立した能動的な存在として生きた労働に対立して自己増殖する。「労働の客体的諸条件は、生きた労働能力に対立した主体的存在

を受け取る。」(MEGA, II/3・6, S. 2284, 圈点—マルクス) 従って、資本は資本家に帰属するが、排他的に所有された生産条件そのものが自己増殖するという事実を概念的に翻訳すれば、資本の価値増殖とは、生産条件に示される死んだ労働が生きた労働に対立して自己増殖する因果関係に還元される。死んだ労働による生きた労働の支配＝「生産者に対する生産物の支配<sup>2)</sup>」(Resultate, S. 64), これが資本の本質である。「資本の本質を成すところの、生きている労働にたいする過去の労働の支配」(MEGA, II/3・5, S. 1604), 「生きた労働にたいする過去の労働の支配としての資本」(Ibid., II/3・1, S. 172), 「資本主義的生産を特徴づけているのは、労働諸条件が、自立し人格化されて、生きた労働に対抗するということ…である。」(Ibid., II/3・6, S. 2014) 「資本関係」(Kapital, III, S. 412) とは、「過去の労働が生きている労働にたいして独立に優勢に相対しているという一定の社会的関係」(Ibid.) である。生きた労働に対立した死んだ労働の自己増殖とは、労働者を手段としての生産物それ自体の自己増殖を意味する。生産のための生産—自己目的としての生産—という資本の特色<sup>3)</sup>は、生きた労働が死んだ労働そのものの増大に奉仕するという資本の独自の本性に起因する。死んだ労働が生きた労働に対立して自己増殖する一方<sup>4)</sup>生きた労働が死んだ労働の自己増殖に役立つという事実は、主体と客体の転倒を意味する。だから、資本は、死んだ労働という客体が生きた労働という本来の主体の支配者として君臨する主客転倒性を内蔵している。「対象化された過去の労働が生きた現在の労働の支配者となる。主体と客体との関係は転倒される。」(MEGA, II/3・1, S. 100) 「資本主義的生産は人格にたいする物象の支配として現われる。」(Ibid., II/3・6, S. 2164) 「労働者が現存の価値の増殖欲求のために存在するのであって、その反対に対象的な富が労働者の発展欲求のために存在するのではないという生産様式」(Kapital, I, S. 649)。因みに、死んだ労働による生きた労働の支配＝労働者を手段としての生産物それ自体の自己増殖は、資本主義の固有な事実をなす。なぜなら、生産条件が労働者から分離して交換によって労働力に転換するのは、資本主義に独自の関係だからである。死んだ労働に

よる生きた労働の支配は、人格的隷属にもとづく労働者の支配形態の対極に位置する。例えば、奴隷制では、剰余労働は主人による奴隷の所有関係に直接起因するから、労働力に転換する生活手段という形態をとった死んだ労働は、資本主義のように生きた労働を直接支配しない。また、封建制の場合<sup>5)</sup>、奴隷制と本質的に同じ人身的な支配・従属関係によって、農奴が直接剰余労働を強制されるがゆえに、生産条件たる死んだ労働は生きた労働を支配しない。その意味で、先行する階級社会での労働者の搾取による支配者の富の形成は、死んだ労働による生きた労働の支配=労働者を手段としての生産物それ自体の自己増殖ではない。生産条件が労働者から分離して労働力と交換される生産形態の基礎上でのみ、死んだ労働による生きた労働の支配=労働者に対立した生産物それ自体の自己増殖が成り立つ。だから、死んだ労働による生きた労働の支配=労働者を手段としての生産物それ自体の自己増殖という「資本の独自の本性」(MEGA, II/3・1, S. 85)は、資本主義をそれ以外の階級社会から区別するメルクマルとしての意義をあわせもつ。付言すれば、マルクスは、すでに1848年時点で、死んだ労働による生きた労働の支配という点に資本の独自の本性がある事実を看破していた。「ブルジョア社会では、生きた労働は蓄積された労働をふやすための手段にすぎない。」(Manifest, Werke, Bd. 4, S. 476)しかし、それだけではない。死んだ労働による生きた労働の支配とは、死んだ労働を表わす物が生きた労働を充用するコアとして主体化する一方で、生きた労働という主体がその自己増殖の単なる手段として物化する不可分の関係を内包している。これこそ、「物の人間化と人間の物化(Personifizierung der Sache und Versachlichung der Person)<sup>6)</sup>」(Resultate, S. 121, Mehrwert, I, S. 366)という「一つの転倒(eine Verkehrung)」(Ibid.)または「諸物の主体化, 諸主体の物化」(Mehrwert, III, S. 484)と規定される事態である。ここで、主導性は生きた労働を支配する死んだ労働の方にあるから、物の人間化と人間の物化とは論理的な先後関係にある。

以上、本節で、資本は生産物による労働者の支配という主客転倒の関係を

特有な本性としてもつ事実を究明した<sup>7)</sup>。

- 1) 「商品が人間の買い手としての役割を演じる…。労働能力の買い手はただ対象化された労働の人格化でしかない…。…生活手段が労働者を買って彼を生産手段に合体させるのである。」(Resultate, S. 78, 圏点—マルクス)
- 2) 「資本家の支配は、…労働者自身にたいする労働者の生産物の支配にすぎない。」(MEGA, II/3・6, S. 2161, 圏点—頭川)
- 3) 「価値増殖そのものを、それゆえまた生産のための生産を刺激および動機としている資本主義的生産の精神」(『資本の流通過程』288 ページ, 圏点—マルクス) というように、資本の価値増殖→生きた労働に対立した死んだ労働そのものの自己増殖→生産のための生産 という三幅対の連鎖にマルクスの分析のもつ鋭さがある。「生産のための生産」=「市場の限界を顧慮しない生産」(Mehrwert, II, S. 522) =「人間的個人の生産的發展に対立する物象的富の表示としての生産」(MEGA, II/3・6, S. 2145, 圏点—マルクス)。因みに、労働者の搾取によって富を享受する資本家は、資本の人格化として生産のための生産を強制される点で資本から疎外される。貧困を享受する労働者のみならず、富を享受する資本家にも資本からの疎外を直視するところに、マルクスの思想のふくらみがある。資本家の疎外の端緒については、Manuskripte, Werke, Bd. 40, S. 522 を見よ。
- 4) 資本=「労働者を支配する富」(Resultate, S. 126) という表現には、死んだ労働そのものが生きた労働に対立して自己増殖するその本質が凝縮している。また、『共産党宣言』にはすでに「賃労働を搾取する所有」(Manifest, Werke, Bd. 4, S. 475) という理論上同じ規定が見られる。
- 5) 「土地所有が直接に労働を搾取するような社会状態」(Mehrwert, III, S. 475)。
- 6) 「物の人化と人の物化」(Kapital, I, S. 128) という概念は、既に労働で直接に取り結ぶ人々の社会的関係が商品交換において諸物の社会的関係として現われる(物の人化=人の物化) 事実で使用されている。
- 7) 生産物による生産者の支配という概念は、労働の社会的性格が物自身の自然的属性として現出する「富の絶対的な形態」(Ibid., III, S. 342) または「絶対的な価値形態」(『資本の流通過程』22 ページ) としての貨幣に関して使われる場合がある(Werke, Bd. 40, S. 455)。また、エンゲルスは、「生産者にたいする生産物の支配」(Von der Utopie zur Wissenschaft, Werke, Bd. 19, S. 226) を価値法則が資本に対して競争の強制法則として作用する意味で使う。

## 4 機械と資本主義的生産

前節で、死んだ労働が生きた労働を支配する特有な生産形態こそ資本主義体制であることを考察した。ところで、工場制度の軸心をなす機械が資本に概念上最も適合的な生産手段であるのは、資本が死んだ労働による生きた労働の支配をもってその独自の本性とする事実由来する。そこで、本節では、資本主義の工場制度とは本来的に機械制大工業である所以を解きほぐす。

「工場（物質的基礎としての機械装置にもとづいて組織された社会的労働の形態としての）」(MEGA, II/3・6, S. 2161)とか「典型的な工場すなわち機械制作業場」(Ibid., S. 2029, 圏点—マルクス)あるいは「資本主義的基礎のうえで行なわれている機械制に対応する発達した労働組織が工場制度であ(る)<sup>1)</sup>」(Ibid., S. 1903, 圏点—マルクス)とかいわれるように、資本主義で工場といえは、機械制作業場を指す。実際、資本主義は産業革命によって達成された機械制大工業への移行でもって初めて確立したとされる<sup>2)</sup>のは、究極的には機械が最大限の価値増殖を至上命令とする資本にとって一番適合的な物質的な生産手段である事実に起因する。それゆえ、機械制大工業こそ資本主義的生産を代表する。「大工業つまり資本主義的生産の原理」(Ibid., II/3・2, S. 348)。それでは、「生産手段—その最も妥当な形態が機械装置である—」(Grundrisse, S. 578)といわれるように、機械はなにゆえ資本にとって最も適合的な生産手段であるのだろうか。それは、本質的には機械が死んだ労働による生きた労働の支配という資本の特有な本性の技術的に最適な担い手として機能する点にある。すなわち、資本の生産過程である限り、労働力は、そこで生産資本の一存在形態であるがゆえに、道具か機械のどちらが使われるにせよ、資本の—成分として消費される。資本の生産過程とは、生産手段が生きた労働を吸収して剰余価値を含む新生産物に転化する過程であるから、労働力が生産資本の一器官として機能するという事は、労働条件が労働者を使用することに等しい。資本の生産過程は、それが単純に労働過程と見られる限り、労働者が労働条件を使用するが、価値増殖過程と見ら

れる限り、労働条件が労働者を使用するという逆転した社会関係が成り立つ<sup>3)</sup>。価値増殖過程での労働条件による労働者の使用という規定は、剰余労働を吸収しての死んだ労働の自己増殖という事実の概念的な表現にほかならない。「資本の概念のうちにある、対象化された労働による生きた労働の取得」(Ibid., S. 572)。ところで、マニュファクチュアでは、労働者は、特殊な道具を使い特殊に専門化された労働力によって専門的な技能として部分労働を遂行するが、労働者が使う道具は労働者の手の延長をなし、労働者の手の動きが道具の動き<sup>4)</sup>をみちびく。だから、マニュファクチュアでの生産過程の基礎は手工業的な熟練であるがゆえに、生産過程は部分労働を担う労働者の作業程度の如何にかかわる。その意味では、マニュファクチュアにあって、労働条件が労働者を使用するといっても、労働条件の動きに労働者は技術上従属していない。つまり、労働条件は労働者に独立して相対しておらず、労働者は労働条件に対して主体性をもつ。ここでは、労働条件の動きが独立化して労働者を技術上リードしていないから、死んだ労働が生きた労働に対して独立してそれを支配するという資本の独自の本性は、いまだ技術的な条件の上では具体化されていない。「あそこ [マニュファクチュア] では、労働者が特殊な用具を使用するのである。」(MEGA, II/3・6, S. 2020, 圏点—マルクス) マニュファクチュアで労働条件が労働者を使用するという命題が妥当するのは、基本的に生産過程が価値増殖過程である限りでのことにすぎない。これに反して、機械制大工業の場合<sup>5)</sup>、以前の特殊な用具を使う労働力に代わって専門化する機械は、原料に接触して合目的にそれを変化させ、労働者の手の労働の代わりを果たす。そこで、労働力が発揮する専門的な技能は消滅してしまい、機械労働は、原料を合目的に変化させる機械の働きに受動的に奉仕するだけの単純労働になる<sup>6)</sup>。機械の作業機部分が労働者の熟練した手の延長たる道具に代わって原料をつかまえて特定の使用価値に変化させる一方、熟練した労働が機械の機能に奉仕する単純労働になれば、手の運動が機械の働きをみちびくのではなく、反対に機械が人間の手から独立して働きその運動を規制するという事態が発生する。「手工業経営では、マ

ニューファクトリアにおいてすらも、人間の運動が用具の運動を導くのであるが、機械制作業場では反対に、機械の運動が人間の運動を導くのである。」(Ibid., S. 2023)「機械制作業場では、機械(原動機)の運動と速度が人間の労働を支配する。」(Ibid., S. 1972) 機械制作業場では、機械の運動が労働者に対して独立化して労働者の動きを機械に従属させる関係が技術的な現実性を受け取る<sup>7)</sup>。労働条件は労働者に対立して主導的に運動する反面、労働者はその独立的な動きに従属した受動的な労働を発揮するにすぎないから、ここでは、死んだ労働が生きた労働に対立してそれを能動的に支配するという資本の独自の本性は、単に生産過程を価値増殖過程と見る限りで概念的に妥当するのみならず、技術的にも具体化されることになる。機械によって、死んだ労働の生きた労働に対する支配という資本の独自の本性が技術的にも具体化されるがゆえに、資本主義は、機械制大工業をもって確立するのである。それゆえ、労働条件が労働者を使うという固有な転倒性は、生きた労働に対する死んだ労働の支配あるいは労働者に対する生産物の支配という資本の特有な本性を根本前提に成り立つ。そもそも、労働過程では労働者が生産手段を使うのに反して、資本の生産過程では逆に生産手段が労働者を使うという規定は、生きた労働に対する死んだ労働そのものの自己増殖という資本の本性に根拠をもつ。だから、生きた労働に対する死んだ労働の支配という資本の本性→価値増殖過程では生産手段が労働者を使うという規定→機械=資本の本性に最も適合的な生産手段、という規定の連鎖が成立する。

翻っていえば、資本による労働の実質的な包摂に対応する独自に資本主義的な生産様式は、機械制大工業において初めて完成する。すなわち、「人間の手労働が生産の主要因であるような以前の生産様式が資本の統御のもとに取り込まれた」(MEGA, II/3・1, S. 165) というように、資本による労働の形式的な包摂とは、歴史的に伝来した既存の労働過程が生産関係の敵対性によって価値増殖過程という性格をもつ事実を意味するにすぎないのに対して、資本による労働の実質的な包摂=独自に資本主義的な生産様式とは、生産条件の排他的な所有に規定されて労働過程が協業や分業から編成される労働の

大規模な社会的形態を指す<sup>8)</sup>。そこで、マニュファクチュアの場合、労働過程は、なるほど生産条件の排他的な所有に対応した労働の社会的形態をもつ点で、独自に資本主義的な生産様式たる資格要件を満たすが、なお資本の独自の本性に照応して死んだ労働が生きた労働に技術上独立化して相対しない不十分性を内蔵する。ところが、機械制大工業は協業や分業に立脚した労働の社会的形態をもつ一方、生産条件は生きた労働を従属化して主体的に運動する。機械制大工業で、生産条件が初めて資本の本性に照応して技術的に独立した運動形態を取得する限りで、独自に資本主義的な生産様式は完成する。資本の独自の本性と機械との特有な結びつけ方に、知の鉅脈としての『資本論』のひきしまった面白さがある。

以上、本節で、死んだ労働による生きた労働の支配という資本の特有な本性を根拠として、機械は、資本に最も適合的な生産手段たる地位を獲得する所以を分析した。

- 1) 「本来のマニュファクチュア（まだ工場ではない）」（*Grundrisse*, S. 413, 圏点—マルクス）。
- 2) 「資本主義的生産様式は、大工業とともに はじめて完全なものとなる。」（*MEGA*, II/3・6, S. 2375, 圏点—マルクス）「産業資本主義の発展は、機械制工業の発展にとまなう。」（ポール・マントウ『産業革命』東洋経済新報社、徳増・井上・遠藤共訳、252ページ、原書初版1906年刊）
- 3) *Kapital*, I, S. 328 f., *Ibid.*, S. 446, *MEGA*, II/3・6, S. 2161, *Resultate*, S. 63.
- 4) 「労働用具…つまり個々の労働者の個人的な腕まえに依拠して使用される用具」（*MEGA*, II/3・1, S. 269）。
- 5) 「資本に対応する生産様式は、二重の生産様式でしかありえない、—マニュファクチュアまたは大工業である。」（*Grundrisse*, S. 477）エンゲルスは、マニュファクチュアと機械制大工業をもって「経済史上の二つの大きな本質的に違う時代」（*Kapital*, I, S. 38）と規定している。
- 6) 「機械の充用の根本原理は、熟練労働を単純労働に替えることである。」（*MEGA*, II/3・1, S. 294, 圏点—マルクス）「機械は、すべての労働能力を単純な労働力に、すべての労働を単純労働に還元する。」（*Ibid.*, II/3・6, S. 2053, 圏点—マルクス）なお、『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、192ページにも同一趣旨の叙述がある。

- 7) 「資本のもとへの人間の労働の包摂—資本による人間労働の吸収—は、ここでは、技術的な事実として現われる。」(MEGA, II/3・6, S. 2058)「機械装置の発達につれて、技術学的にも労働の諸条件が労働を支配するものとして現われる。」(Ibid., S. 2162) 同一内容の叙述は、Ibid., S. 2059, *Kapital*, I, S. 425, S. 446にもある。
- 8) 拙稿「資本主義的生産関係と生産力」『一橋論叢』第117巻第6号, 1997年参照。

### むすび

本稿で、生産条件の排他的所有の二面として資本と賃労働が成り立つメカニズムを解き、生産条件による労働者の支配という逆立ちした関係にこそ資本の独自の本性がある事実を確定した。従って、資本と賃労働が生産条件の排他的所有の二面として成り立つ以上、生産条件を排他的所有の対象から解放して社会的所有<sup>1)</sup>へ移せば、資本と賃労働は消滅する結果、生産条件による労働者の支配という主客転倒は解消される。つまり、生産条件が社会的所有へ転化され生産条件と労働者との本源的結合<sup>2)</sup>が回復されれば、生産条件は労働者に対立して生きた労働を支配することをやめる。生産条件と労働者との本源的結合の回復とともに、死んだ労働による生きた労働の支配は消滅する。反対に、資本主義の廃絶後、死んだ労働は、労働者の労働軽減が生活改善かに役立てられ労働者の物質的狀態向上の手段として蘇る。その意味で、生産条件と労働者との本源的結合の回復とともに、生きた労働による死んだ労働の支配という社会的生産の本来の性格が復活することになる。

- 1) 資本主義の廃絶=生産条件の社会的所有への転化の基礎では、生産条件を使ってできる労働生産物はすべて労働者に帰属するから、その社会的所有は同時に自己労働による生産物を自分ですべて取得する個人的所有の再建すなわち搾取の廃絶を内蔵する(拙稿「剰余労働消滅と個人的所有の再建」『高知論叢』第48号, 1993年)。
- 2) 「労働する人間と彼の労働手段との間の原結合」(*Lohn, Preis und Profit, Werke*, Bd. 16, S. 131, 圏点—マルクス)。「生産手段と労働力との本源的な結合」(*Kapital*, II, S. 38)。

(高知大学教授)